

母性看護学実習における病棟実習の学びと課題

－ 実習終了後のレポートから －

Nursing students' learning outcomes and challenges from postpartum clinical practice.

－ Research based on the clinical practice paper －

加藤 泉・安田裕子

Izumi Kato and Yuko Yasuda

要 約

本研究は、令和元年度にA大学母性看護学実習を終了した3年生の看護学生を対象に、2週間のうちの産科医療施設実習（1週間）からの学びと課題を明らかにし、効果的な実習方法を検討する目的で、実習終了後の「母性看護学実習からの学び」のレポートを分析した。

主な学びは、【母親学級】、【産婦のケア】、【褥婦の精神的ケア】、【保健指導・ケア】、【褥婦の身体的ケア】、【授乳・愛着形成】、【帝王切開の看護】、【疲労軽減への看護】、【外国人コミュニケーション】、【新生児の観察】、【沐浴のケア】だった。

今後、全ての学生が妊婦との関わりを体験できる実習方法の検討、分娩見学が経験できない場合、分娩に関するDVD等の視聴や教材の検討が必要である。さらに、コミュニケーションにおいては、外国人妊産褥婦へ対応できる事前準備や、日々変化する褥婦と新生児の看護を経験できる内容にしていく必要がある。

キーワード：母性看護学実習、病棟実習、産科医療施設実習、看護学生

I. はじめに

近年、出生数の減少や産科医療施設の減少により、母性看護学実習を行う実習施設の確保が課題となっている。文部科学省の「看護系大学の現状と課題」の中で、看護系大学数及び入学定員の推移をみると、平成3年で11大学、定員558名であったが、平成30年度で263大学、定員23,667名と、大学数は平成3年に比べ、23.9倍、定員は、42.4倍と急増している（文部科学省、2018）。また、厚生労働省の「令和元年（2019）人口動態統計の年間推計」の中で、出生数の年次推移をみると、平成3年で1,223,245人だったが、令

和元年度で、864,000人と過去最低を更新している（厚生労働省、2019）。これらのことから、母性看護学実習施設の確保は困難となっており、臨地実習から学生が最大限学べるように実習内容の工夫が求められる。

厚生労働省は、平成27年度9月に「母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について」として、近年の学校養成所の増加や少子化の伸展に伴い、特に母性看護学実習及び小児看護学実習について、実習施設確保が困難であることから、①母性看護学実習及び小児看護学実習施設としては、病院以外にも、診療所、保育所、小学校、中学校、

保健センター、社会福祉施設等を含めることができること、②実践活動外学習は、臨地実習を充実させることを目的としたものであることを踏まえつつ、臨地実習の時間を十分に確保した上で、その活用を推進できることを通達した（厚生労働省、2015）。

A大学の平成30年度までの母性看護学実習では、分娩件数の減少や、受け持ちの同意が得られにくい状況の中、学生5～6名ごとに4施設に別れて2週間の実習を行っていた。実習内容は、一組の母子を通して正常な経過をたどる対象者をウェルネスの視点で生活の変化や親役割獲得のために必要な援助の根拠を理解した看護過程の展開を行い、セルフケアの援助や日常生活援助を実践してきた。そのような中、令和元年より、実習施設が4施設から2施設へ縮小され、学生が受け持ちの対象に応じた看護を実践することが、さらに困難な状況となることが予測された。2施設に縮小した実習施設の限られた環境の中で、学生が対象に応じた看護を実践する基礎的能力を養うことができる実習方法の検討が必要である。そこで、臨地実習を充実させる目的として、2施設へ縮小した実習の展開方法の見直しを行った。2週間のうちの1週間は産科医療施設実習、2日間は実践活動外の学内実習、1日は産婦人科外来実習か保健センターの臨地実習、1日はマタニティ育児用品調査の臨地実習を行うスケジュールとした。

外来実習から、梶原ら（2005）によると学生は「幅広い年齢層や疾患を持つ患者が来院することや、社会人としてマナーの重要性、医療者としていかにあるべきかを学んだ」と述べている。また、核家族化、少子化が進行する中で、赤ちゃんとのふれあい経験がない

まま親となっている多くの妊婦には、子育てを見据えた出産準備教育が必要である。ベネッセ教育総合研究所、第1回妊娠出産子育て基本調査（横断調査）報告書（2006）において、第1子妊娠中の妻・夫とも、約半数の人が赤ちゃんとの触れ合い経験がないまま親となっていると報告されている。学生がこれらの必要性を学ぶためには、保健センターにおける母親教室や母子健康手帳交付の見学、マタニティ育児用品調査は有用であると考えた。さらに、母性看護学実習目標の、多様なライフサイクルにおける女性の理解と必要な看護の理解を深めることにも視点をあてている（A大学看護学実習要項、2019、母性看護学実習）。

そこで本研究では、産科医療施設実習に焦点を合わせ、学生のレポートの内容を分析し、2週間のうちの産科医療施設実習（1週間）における経験から、どのような学びが得られたのか学びの内容を把握することとした。レポートのテーマは、「母性看護学実習からの学び」であり、今後の課題を明らかにすることは、母性看護学実習の目標が達成できる効果的な実習方法を検討するために有意義であると考えた。A大学の母性看護学実習の概要は表1に示す。

表1 A大学の母性看護学実習の概要

実習目的	妊娠・分娩・産褥期にある母子およびその家族の特性を理解し、対象の個性に応じた看護が実践できる基礎的能力を養う。
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 妊娠の経過を理解するとともに、妊娠によって生じる心身の変化を知り妊婦に必要な援助を理解することができる。 2 分娩によって生じる心身の変化に対して産婦・胎児がどのように適応しているのかを把握し、産婦への援助の必要性を理解することができる。 3 分娩後に生じる心身の変化を体験している褥婦およびその家族について健康課題に焦点をあて、セルフケアへの援助や日常生活援助を実施できる。 4 胎内の生活から胎外の生活へと大きな変化を受けている新生児に生じる変化や発育・発達を理解し、新生児期に特有な看護技術を実践することができる。 5 多様なライフサイクルにおける女性の理解と必要な看護について理解できる。
履修対象者	A大学看護学部看護学科3年生（71名）
産科病棟実習日数	3～4日間

Ⅱ. 研究目的

本研究の目的は、母性看護学実習を終了したA大学3年生の看護学生を対象とした実習終了後の「母性看護学実習からの学び」のレポートの内容を分析し、2週間のうちの産科医療施設実習（1週間）からの学びと今後の課題を明らかにし、母性看護学実習の目標が達成できる効果的な実習方法を検討するための一助とする。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

A大学看護学部において、母性看護学実習を終了した3年生71名のうち、研究の主旨を理解し協力の得られた学生の課題レポートとした。

2. 研究期間

令和2年2月～令和2年11月

3. データの収集方法

母性看護学実習評価終了後に、研究者より、研究の主旨・目的・方法等に関する説明を行い、本研究への協力を依頼した。研究協力の意思のある学生には、承諾書の提出を依頼した。課題レポートのテーマは、「母性看護学実習を通して学んだこと」であり、学生が産科医療施設実習、実践活動外の学内実習、産婦人科外来実習か保健センターの臨地実習、マタニティ育児用品調査の臨地実習について項目別に学びを記載し、記載内容は自由とした。

4. 分析方法

分析方法は、ベレルソンの内容分析手法を用いた質的研究である。分析対象となったレポートに記載された記述の中から、産科医療施設実習に関する「学んだこと、感じたこと、理解したこと」について、具体的に述べ

られている文章を抽出し、類似性と共通性をもとに集めてグループ化し、サブカテゴリを生成した。さらに抽象度をあげてカテゴリとし名称をつけた。文章の抽出と分類にあたっては、妥当性を確保するために、共同研究者1名とPeer debriefingを共通理解が得られるまで検討を重ねた。

Ⅳ. 倫理的配慮

対象となる学生に対し、研究の主旨・目的・方法等、参加しない場合でも、あるいはその結果によって成績に影響を与えることは一切ないこと、氏名等を隠して複写したレポートは、ランダムに番号を付けて管理を行い、個人が特定できないようにしたもので分析すること、鍵のかかる書庫に厳重に保管し、情報漏洩に配慮することを口頭および文章で十分に説明した。結果は、学会発表や論文投稿等を行うことを説明した。本研究の調査は、所属機関研究倫理委員会の承認を得て実施した(19-5)。

Ⅴ. 母性看護学実習の概要

母性看護学は、2年次後期に履修する母性看護学概論（1単位）と母性看護援助論Ⅰ（2単位）、3年次前期に母性看護援助論Ⅱ（1単位）、母性看護学実習（2単位）で構成されている。

母性看護学実習では、3～4日間を産科医療施設で実習し、2日間は実践活動外の学内実習、1日は産婦人科外来実習か保健センターの臨地実習、1日はマタニティ育児用品調査の臨地実習をしている。

産科医療施設実習では、一組の母子を通して正常な経過をたどる対象者の健康課題の抽出を行い、受け持ち翌日には看護計画を立案

し援助を展開している。妊娠・分娩・産褥期にある母子およびその家族の特性を理解し、対象の個別性に応じた看護が実践できるよう基礎的能力を養うことを目的としている（A大学看護学実習要項，2019，母性看護学実習）。A大学の母性看護学実習の概要は表1に示す。

VI. 結果

看護学実習を終了した対象学生71名のうち57名（回収率80.3%）から同意が得られ、分析の対象となったレポートは、産科医療施設実習からの学びについて記載されていた54名のレポートであった。産科医療施設実習からの学びについて記載されている文章を抽出した結果、186の記述内容が抽出された。この記述内容を、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期・その他の視点で分類し、妊娠期の看護に関する学び、分娩期の看護に関する学び、産褥期の看護に関する学び、新生児期の看護に関する学び、その他の学びとした。妊娠期の看護に関する学びの記述内容は6であり、3サブカテゴリ、3カテゴリが抽出された。分娩期の看護に関する学びの記述内容は16であり、4サブカテゴリ、2カテゴリが抽出された。

産褥期の看護に関する学びの記述内容は87であり、21サブカテゴリ、9カテゴリが抽出された。新生児期の看護に関する学びの記述内容は57であり、10サブカテゴリ、5カテゴリが抽出された。その他の学びの記述内容は20であり、10サブカテゴリ、5カテゴリが抽出された。カテゴリは【 】サブカテゴリは[]，記述内容は「 」として示す。

1. 妊娠期の看護に関する学び

妊娠期の看護に関する学びは、以下の表2に示すように、【母親学級】，【妊婦の観察】，【ケアの配慮】3つのカテゴリと、3つのサブカテゴリで構成された。サブカテゴリにおいては、[母親学級の意義と重要性] [NST・腹部緊満感の観察]，[異常妊娠への配慮]であった。[母親学級の意義と重要性]の記述内容は、「母親教室では不安を減らす言葉かけ、マイナスな気持ちにならない環境を提供することが重要」，「母親学級から児の適切な擁護には、妊娠期からの切れ目ない援助が必要」などが記述されていた。

2. 分娩期の看護に関する学び

分娩期の看護に関する学びは、以下の表3に示すように、【産婦のケア】，【産婦のニーズ】2つのカテゴリと、4つのサブカテゴリで構成された。サブカテゴリにおいては、[精

表2 妊娠期の看護に関する学び

カテゴリ	サブカテゴリ	主な記述内容
母親学級(4)	母親学級の意義と重要性(4)	・妊婦が、出産がストレスや苦痛と感じないよう、楽しく出産できるよう援助することは重要。 ・母親教室では不安を減らす言葉かけ、マイナスな気持ちにならない環境を提供することが重要。 ・母親学級から児の適切な擁護には、妊娠期からの切れ目ない援助が必要。 ・母親学級は助産師と関わる機会となり、安心した分娩につながる。
妊婦の観察(1)	NST・腹部緊満感の観察(1)	・NSTの結果と、妊婦の訴えから腹部緊満感の有無を判断することが必要。
ケアの配慮(1)	異常妊娠への配慮(1)	・切迫早産を周囲に知られたくない思いに配慮するためには、大きな声では話さないことが大切。

() 内の数字は記述数を表わしている

表3 分娩期の看護に関する学び

カテゴリ	サブカテゴリ	主な記述内容
産婦のケア(12)	精神的（寄り添うケア・声掛けの重要性）サポート(8)	・産婦が落ち着き安心して分娩に臨むためには、寄り添い、声をかけることが必要。 ・産婦が分娩を頑張るために、胎児の状態を伝えることが必要。 ・産婦のニーズや不安へ対処する関わりには、信頼関係が大切。 ・産婦と助産師の間には、産婦が不安を言出できる声かけや労苦時の適切な声かけが必要。 ・産婦が安心するためには、寄り添うことが必要。 ・産婦が元気づけられるような声かけが大切。
	身体的サポート(2)	・有効な労力ができるよう、間欠的に休息の援助をすることが大切。 ・胎盤の観察は、児の生後状況や子宮復古不全因子の予測につながるが重要。
	社会的サポート(2)	・産婦の状態に合わせて生むことのできる環境を作る援助が必要。 ・家族が産婦のサポートができるように付き添う家族への援助が必要。
	産婦のニーズ(4)	・産婦のニーズに応じた援助(4)

() 内の数字は記述数を表わしている

神的サポート（寄り添うケア・声掛けの重要性）]，[産婦のニーズに応じた援助]，[身体的サポート]，[社会的サポート]であった。[精神的サポート（寄り添うケア・声掛けの重要性）]の記述内容は「産婦が安心して分娩に臨むためには、寄り添い、声をかけることが必要」などが記述されていた。[産婦にニーズに応じた援助]の記述内容は、「産婦が望む援助を行うことが必要」などが記述されていた。

3. 産褥期の看護に関する学び

産褥期の看護に関する学びは、以下の表4に示すように、【褥婦の精神的ケア】、【保健指導・ケア】、【褥婦の身体的ケア】、【授乳・愛着形成】、【帝王切開の看護】、【疲労軽減への看護】、【外国人コミュニケーション】、【褥婦のケア】、【母乳・愛着形成】9つのカテゴリと、21のサブカテゴリで構成された。

サブカテゴリにおいては、[退行性変化のアセスメント]，[保健指導・ケア時の配慮]，[褥婦の心のケア・不安軽減]，[経産婦と初産婦の特徴を踏まえたサポート]，[退院後のフォローアップ]，[経産婦の保健指導]，[自宅でのイメージを踏まえた保健指導]，[家族に対する個別ケア]，[進行性変化のアセスメント]，[新生児の吸啜の重要性]，[母乳分泌とホルモンに関すること]，[愛着形成についての学び]，[授乳方法の援助]，[観察の重要性・アセスメント]，[家族ケア]，[合併症予防]，[疲労への配慮]，[休息への看護の必要性]，[外国人褥婦への配慮・コミュニケーション]，[母子の観察の重要性]，[母子関係]であった。

[退行性変化のアセスメント]の記述内容は、「産褥日数に応じた子宮底の観察と把握が重要」，「子宮復古の観察は、様々な観察項

目を多面的に見ること、状態を毎日触診することで変化が分かった」などが記述されていた。[保健指導・ケア時の配慮]の記述内容は、「褥婦が前向きになるためには、気持ちを受容し、前向きになれる声かけが必要」などが記述されていた。

4. 新生児期の看護に関する学び

新生児期の看護に関する学びは、以下の表5に示すように、【新生児の観察】、【沐浴のケア】、【保温】、【新生児のバイタルサイン測定時の学び】、【哺乳に関すること】5つのカテゴリと、10のサブカテゴリで構成された。サブカテゴリにおいては、[胎外生活適応過程の観察]，[安全な沐浴・準備・手技]，[原始反射の観察・理解]，[新生児の全身観察の重要性]，[黄疸の観察]，[沐浴実施からの学び]，[沐浴のアセスメント]，[低体温防止・保温の重要性・低体温防止のケア]，[測定の手技]，[哺乳時のケア]の10であった。[胎外生活適応過程の観察]の記述内容は、「新生児のアセスメントは、生後日数に応じた状態か判断することが必要」などが記述されていた。[安全な沐浴・準備・手技]の記述内容は、「新生児を安心させるために一つ一つの動作を丁寧に行い安全に沐浴すること」，「湯の温度確認は、湯温計と上腕の内側で適温か確認することが重要」などが記述されていた。

5. その他の学び

その他の看護に関する学びは、以下の表6に示すように、[母性看護の意義]，[看護者の関わり]，[チーム医療]，[その他]，[看護過程・アセスメント]5つのカテゴリと、10のサブカテゴリで構成された。サブカテゴリにおいては、[母子相互援助]，[生命誕生の意味]，[看護者の配慮]，[地域の育児支援の

必要性], [チーム医療周囲のサポート], [情報共有], [兄弟への配慮], [視聴覚教材からの学び (病棟で視聴)], [父子関係], [アセスメントの重要性] であった。

表4 産褥期の看護に関する学び

カテゴリ	サブカテゴリ	主な記述内容
褥婦の精神的ケア (9)	褥婦の心のケア・不安軽減 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・褥婦のサポート体制にあったアドバイスが必要。 ・褥婦の不安の軽減のためには、家族の協力体制を整えることが必要。 ・育児不安のある初産婦には、ブライバシーに配慮したコミュニケーションが必要。
	経産婦と初産婦の特徴を踏まえたサポート (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・経産婦も一人目と新生児の身体の大きさや特徴は異なるため、サポートは必要。
	退院後のフォローアップ (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・退院後の褥婦の精神的ケアには、退院後1週間の検診で話すことが有効。 ・褥婦の不安への対処として、退院後1週間検診で相談することが必要。
保健指導・ケア (20)	経産婦の保健指導 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の経験を聞き出しながら助産師の経験を提唱すると共感でき理解しやすい。 ・「経産婦だから知っているだろう」と思い込まず、知識の確認することが重要。
	保健指導・ケア時の配慮 (11)	<ul style="list-style-type: none"> ・沐浴時腹臥位の手技への不安に対し、共感の言葉をかけ代替え案を伝えることが必要。 ・褥婦の出来ていること、身体的に順調であることを伝えることは、褥婦の向上心につながる。 ・育児技術の習得には、早期に母子同室とし、授乳やオムツ交換を褥婦が頻回に行うことが必要。 ・褥婦が前向きになるためには、気持ちを受容し、前向きになれる声かけが必要。 ・沐浴指導の見学から個性は大事である。 ・褥婦が自分に合った授乳方法を見つけるために、不安を軽減させる声かけが必要。 ・褥婦が理解できるように説明することが必要。 ・沐浴技術の獲得には、アドバイスし、誉めながら行うことが必要。 ・技術の指導だけでなく、その人の背景や育児レベルに合わせた看護が大切。
	自宅でのイメージを踏まえた保健指導 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・退院後沐浴を不安なくできるよう、自宅のイメージがつく声掛けが必要。 ・自宅での沐浴をイメージできるように、個性のある対応が必要。 ・退院後の生活に視点をのいた看護が大切。
	家族に対する個別ケア (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の背景に合わせた指導を提供していくことが大切。 ・育児の充実のためには、パートナーが褥婦をサポートすることが必要。 ・様々な家族形態に合った援助を行うためには、家族に関する情報収集が必要。 ・褥婦の生活を支えるためには、家族や周りのサポートが重要。
	褥婦の身体的ケア (18)	<ul style="list-style-type: none"> ・産褥日数に応じた子宮底の観察と把握が重要。 ・子宮復古の観察は、様々な観察項目を多面的に見ること、状態を毎日触診することで変化が分かった。 ・産褥経過の観察から、全身の復古を学ぶことができた。
授乳・愛着形成 (14)	進行性変化のアセスメント (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・褥婦さんとの関わりから退行性変化と進行性変化を学べた。 ・熱感のある乳房の観察から進行性変化の経過を学んだ。
	新生児の吸吮の重要性 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・退行性変化・進行性変化の両方に新生児の「吸吮」が関係している。 ・吸吮刺激が、ホルモンへ働き子宮収縮が進む。
	母乳分泌とホルモンに関する (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・進行性変化は、直接授乳によってホルモンの分泌に影響する。 ・オキシトシンやプロラクチンのメカニズムが母乳育児に関連してくる。
	愛着形成についての学び (6)	<ul style="list-style-type: none"> ・母親の授乳行動を認めることが、愛着形成を向上させる関わり方である。 ・母親が育児に励むためには、母子の愛着形成を促す関わりが必要。 ・授乳方法を見つけるために工夫する褥婦との関りから、愛着形成の理解を深めた。 ・母子の早期接触は、愛着形成、進行性変化、退行性変化に効果がある。
	授乳方法の援助 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・母乳育児確立のためには、褥婦が授乳しやすい方法を見つけられる援助が必要。 ・母乳育児支援では、上手に行えていることをほめたり、一緒に喜んだりすることが必要。 ・個性のある授乳指導のために、授乳中の関りが必要。
帝王切開の看護 (9)	観察の重要性・アセスメント (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・帝王切開になることでリスクが上がリ、産褥の状態だけの観察ではいけない。 ・帝王切開では、術後と産褥経過経のアセスメントが重要。
	家族ケア (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・家族との関わりの時間も必要。
	合併症予防 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・帝王切開による痛みの軽減が、早期離床のために必要。 ・帝王切開は周手術期の急性期看護と同じように早期離床が必要。 ・帝王切開術後は、合併症の予防と子宮収縮を促す看護が必要。
疲労軽減への看護 (8)	疲労への配慮 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・疲労感への配慮として、質問や観察項目を整理し、訪室の回数と時間を最小限にする必要性。 ・分娩に伴う褥婦の疲労感に配慮した接し方を学ぶことができた。 ・褥婦は疲れているため訪室時間をずらすなどの配慮、気配りが必要。
	休息への看護の必要性 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・褥婦に対する育児入院の場を設けられていること。 ・褥婦に休息の目的と、休息を促す援助が必要。 ・褥婦の看護には、授乳の間の休息が必要。
外国人コミュニケーション (6)	外国人褥婦への配慮・コミュニケーション (6)	<ul style="list-style-type: none"> ・理解してもらうには、声のかけ方や接し方に工夫が必要。 ・ポルトガル語によるコミュニケーションの工夫が必要。 ・外国の方に合わせたコミュニケーションの工夫が必要。 ・褥婦との関わりは、非言語的コミュニケーションも必要。 ・ポルトガル語を用いることにより、褥婦と信頼関係ができる。
褥婦のケア (2)	母子の観察の重要性 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・褥婦と新生児を同時に観察していくことは難しく、褥婦も新生児も日々の観察が重要。
母乳・愛着形成 (1)	母子関係 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・授乳見学から、母子関係の学びになった。

() 内の数字は記述数を表わしている

表5 新生児期の看護に関する学び

カテゴリ	サブカテゴリ	主な記述内容
新生児の観察(29)	原始反射の観察・理解(2)	<ul style="list-style-type: none"> 新生児の原始反射の観察が重要。 沐浴から、原始反射や筋緊張、皮膚の弱さについて理解を深めた。
	新生児の全身観察の重要性(8)	<ul style="list-style-type: none"> 新生児のアセスメントは、生理的体重減少や生理的黄疸など生理的変化の観察が重要。 新生児は、観察と多方面からのアセスメントが大切。 新生児治療が必要なかを判断するためには、知識が必要。 新生児の観察は、生理的変化や身体機能を理解が必要。 新生児の健康状態の判断は、啼泣の理解が必要。 低出生体重児のアセスメントは、新生児の特徴と関連づけて考えることが必要。 新生児の異常の発見のためには、観察項目を明確にすることが必要。
	黄疸の観察(6)	<ul style="list-style-type: none"> 複数の新生児比を比較し、黄疸で皮膚の色が違うことを理解できた。 新生児の排便状況の観察は、ビリルビン値に影響することが学べた。 生後日数にあった生理的黄疸の経過をたどっているか観察が重要。
	胎外生活適応過程の観察(13)	<ul style="list-style-type: none"> 新生児は、正常の変化と比較しながら観察を行うことが重要。 静脈間、動脈管、卵円孔が閉鎖することで心雑音が聴こえなくなる。 生理的体重減少の計算からの変化を学ぶことができた。 新生児の黄疸や臍が乾燥していく様子を観て、胎外生活に適応していく過程を学んだ。 新生児が子宮外生活に適応するためには、褥婦と家族の育児意欲や知識が影響する。 新生児のアセスメントは、生後日数に応じた状態か判断することが必要。 新生児の胎外生活への適応過程が分かった。
沐浴のケア(17)	安全な沐浴・準備・手技(12)	<ul style="list-style-type: none"> 新生児を安心させるために一つ一つの動作を丁寧に安全に沐浴すること。 安全な沐浴を行うには、頸部を安定した状態で保持し児を沐浴層に入れることが重要。 湯の温度確認は、湯温計と上腕の内側で適温を確認することが重要。 沐浴を実施には、事前準備が重要・仰臥位から腹臥位の安全な方法を学んだ。
	沐浴実施からの学び(4)	<ul style="list-style-type: none"> 新生児を沐浴できる状態であるか判断することが重要。 沐浴体験が新生児に触れる貴重な体験になった。 抱っこやドライテクニックは、激しく泣いたりすると気持ちが焦り、実施することは難しい。
	沐浴のアセスメント(1)	<ul style="list-style-type: none"> 新生児を沐浴できる状態であるか判断することが重要。 沐浴体験が新生児に触れる貴重な体験になった。 抱っこやドライテクニックは、激しく泣いたりすると気持ちが焦り、実施することは難しい。
保温(6)	低体温防止・保温の重要性・低体温防止のケア(6)	<ul style="list-style-type: none"> 新生児の低体温予防を予防するためには、熱放散のルートも考えることが大事。 新生児が成長していくためには、低体温を予防のための環境調整が大切。 新生児では体温調節機能が未熟で体温が変化しやすいため、観察が重要。 帝王切開での出産直後、1時間値、2時間値の見学から保温の重要性を学んだ。 帝王切開出生直後、ラジアントウォーマーで、皮膚の露出を最小限にすることが必要。
新生児のバイタルサイン測定時の学び(3)	測定の手技(3)	<ul style="list-style-type: none"> 新生児の呼吸数を聞き取る際、腹部と胸部を長時間露出しないための工夫が必要。 新生児のバイタルサインの測定に時間がかかると沐浴や授乳の時間に影響する。 新生児の正確な心拍数と呼吸数を測定するためには、落ち着かせることが必要。
哺乳に関すること(2)	哺乳時のケア(2)	<ul style="list-style-type: none"> ピン哺乳の際に児の口に乳首を含ませ方を学んだ。 新生児の哺乳状態は、乳頭の状態と児の哺乳力からアセスメントが必要。

() 内の数字は記述数を表わしている

表6 その他の看護の学び

カテゴリ	サブカテゴリ	主な記述内容
母性看護の意義(6)	母子相互援助(3)	<ul style="list-style-type: none"> 新生児は、褥婦の身体状況によって発育に影響を及ぼすため、母子への看護が必要。 新生児の生活リズムをつけるために、褥婦や新生児に合わせた援助が必要。 新生児の生理的変化を観察するためには、褥婦の育児行動への思いを知ることが必要。
	生命誕生の意味(3)	<ul style="list-style-type: none"> 新生児が誕生し、成長していくことはとてもすごいこと。 命の誕生を至近距離で感じ、命の大切さ、異常なく退院してほしい気持ちが強くなった。 助産師の説明から、妊娠、出産は命の誕生であり、命の大切さ・重みについて学べた。
看護者の関わり(2)	看護者の配慮(2)	<ul style="list-style-type: none"> 気配りや配慮が看護である。 褥婦との関わり方は、パートナーの情報からも考えることが必要。
チーム医療(3)	地域の育児支援の必要性(1)	<ul style="list-style-type: none"> 妊娠期から産褥期、退院後も切れ目のない育児支援を行うためには、地域の育児支援が必要。
	チーム医療周囲のサポート(1)	<ul style="list-style-type: none"> 看護はチーム医療であり、自分一人の力で解決するのではなく支えあうことが必要。
	情報共有(1)	<ul style="list-style-type: none"> 他者へケアを依頼する時は、情報共有が重要。
その他(5)	兄弟への配慮(1)	<ul style="list-style-type: none"> 上の子が役割の変化を受け入れるためには、上の子に愛情を注ぐことが必要。
	視聴覚教材からの学び(病棟で視聴)(2)	<ul style="list-style-type: none"> 分娩のDVDの視聴から助産師、医師の役割について理解できた。 命の大切さを学ぶことができた。
	父子関係(2)	<ul style="list-style-type: none"> 夫は父親になり、責任感が増える。 父親が行う沐浴は、児への愛着、父親の責任、父子関係を確立に必要。
看護過程・アセスメント(4)	アセスメントの重要性(4)	<ul style="list-style-type: none"> 褥婦と新生児の経過のアセスメントには、正常値を理解することが重要。 母子双方を合わせてアセスメントや計画を立て実施していく必要がある。 退行性・進行性変化・胎外生活の適応のアセスメントは、複数の情報を関連付けることが必要。

() 内の数字は記述数を表わしている

VII. 考察

1. 妊娠期の看護に関する学び

妊娠期の看護を経験できるのは、主に A 病院では、妊婦を対象とした母親教室の見学、B 病院では、入院中の妊婦を対象とした実習である。これらの実習は、3～4 日の実習の中で、少数の学生のみ体験できる状況となっている。カテゴリの【母親学級】において、「母親教室では不安を減らす言葉かけ、マイナスな気持ちにならない環境を提供することが重要」、「母親学級から児の適切な擁護には、妊娠期からの切れ目ない援助が必要」という、妊婦が安心できる言葉かけの必要性、妊娠期からの継続した支援の重要性を理解していた。瀬瀬・服部（2015）は、妊婦の主体性に関わる支援方法についての文献検討の中に、妊娠期からの継続的な支援体制の中で、助産師が意図的に妊婦の主体性を引き出すための働きかけや、支援の姿勢を実践することによって妊婦のやる気は引き出され、それがより主体的な自己管理や出産育児への姿勢へとつながると考えられることから妊婦の主体性を引き出すための助産師の支援は、妊娠期からの育児支援の基盤となる重要な支援だといえると述べている。また、志賀（2018）は、周産期メンタルヘルスの現状と課題の中に、妊娠中から産後にかけてメンタルヘルスの不調を来すリスク因子を評価し、兆候を早期発見することで、家族や産科施設、地域からのサポート体制を強化することができると考えたと述べている。門（2020）は、保健センター実習を取り入れた母性看護学実習においての学びの中に、学びの内容から場の違いによる多様な看護方法および母子を取巻く状況や問題について育児期まで延長して捉えられ、母子の支援者が専門職に限らず地域の

人々など多種存在することを認識していた。しかし、多職種の連携や多職種間での看護師の役割の認識には至らず、母子を取巻く人々や現状把握までの概念的な切れ目ない支援の重要性の理解であり、今後の実習方法の検討の必要性が示唆されたと述べている。このことから、3～4 日の期間に全員の学生が妊婦との関わりを体験することは困難である。

表 1 の実習目標 1 については、妊婦を受け持つことができた学生は、理解が深まったと考えられる。

2. 分娩期の看護に関する学び

分娩見学の状況は、年々機会が減っている。学生が実習を行っている日中の分娩は限られている。A 病院においては、経膈分娩の見学はできなかったが、帝王切開術の見学ができた学生もいる。分娩を見学できた学生は、【産婦のケア】において、「産婦が落ち着き安心して分娩に臨むためには、寄り添い、声をかけることが必要」という、産婦に寄り添うことの大切さを学んでいた。北林と中山（2011）は、母性看護学実習における実習形態変更後の実習の効果・学びの状態の評価から、分娩見学を実際に行うことは、経過と看護の理解に効果的であった。分娩見学を行える環境調整がより必要である。また、見学できなかった学生に対して、見学できた学生から情報交換が有効に行えるように配慮することが大切であると述べている。その他の看護の学び表 6 から、[視聴覚教材からの学び（病棟で視聴）]において、「分娩の DVD の視聴から助産師、医師の役割について理解できた」、「命の大切さを学ぶことができた」という、分娩期の医療者の役割や出産を肌で感じていた。しかし、3～4 日間の実習期間中に、より多くの学生が分娩期の看護を経験するこ

とは、難しいと考えられる。

表1の実習目標2については、産婦を受け持つことができた学生は、理解が深まったと考えられる。

3. 産褥期の看護に関する学び

褥婦の受け持ちは、ほぼ全ての学生ができしており、女子学生は授乳見学も体験できる状況となっている。【褥婦の身体的ケア】において、「産褥日数に応じた子宮底の観察と把握が重要」、「子宮復古の観察は、様々な観察項目を多面的に見ること、状態を毎日触診することで変化が分かった」という、正常な退行性変化のアセスメントには、日々の観察の重要性を学んでいた。これは、日々変化する子宮復古の状態を観察する経験から、退行性変化の理解が深まったと考える。中田・大槻(2014)は母性看護学実習における看護技術の経験の分析から、退行性変化である子宮底の測定悪露の観察、進行性変化の乳頭・乳房の観察の経験率が高かったことは、看護師国家試験に対応した実習内容が経験できていると推測される。産褥経過（退行性変化および進行性変化）の観察は母性看護学において今後も重点をおくべき看護技術であると述べている。

【保健指導・ケア】において、「褥婦が前向きになるためには、気持ちを受容し、前向きになれる声かけが必要」という、褥婦が安心して子育てができる大切さを学んでいた。また、保健指導の見学から、[褥婦の心のケア・不安軽減]、[経産婦と初産婦の特徴を踏まえたサポート]、[退院後のフォローアップ]、[経産婦の保健指導]、[自宅でのイメージを踏まえた保健指導]、[家族に対する個別ケア]という、褥婦への精神的なケアの必要性を理解していた。実習の中で母親との関り

から母親の育児不安や育児負担の理解を深め、医療者としての子育て支援の役割について認識を高めることができたと考える。【授乳・愛着形成】、【褥婦のケア】、【母乳・愛着形成】において、「授乳方法を見つけるために工夫する褥婦との関りから、愛着形成の理解を深めた」、「母乳育児確立のためには、褥婦が授乳しやすい方法を見つけられる援助が必要」という、日々の授乳見学から、児への愛着形成の過程を学んでいた。一方男子学生においては、女子学生とペアで実習を行っているが、授乳見学や子宮復古の状態を触診する機会が制限されることが多い状況である。

二川ら(2015)の、5名の男子看護学生を対象にした調査によると、母性看護学実習でどのような体験をしたか、その時感じたこと、考えたこと、行動したことなど、インタビューガイドに基づいて面接を行った。その分析から、男子学生の学習機会が限られていたとしても、男子学生は体験からの感動を通して看護についての思考を深めることができ、実習中は、男子学生に可能な限りの対象と接する機会を作ることが重要であると述べている。

帝王切開術後の褥婦から、[観察の重要性・アセスメント]、[家族ケア]、[合併症予防]という、術後経過と産褥経過の観察が必要であること、術後合併症予防のための早期離床が必要であることを学んでいた。学生は、周手術期の成人看護学実習を終了した段階での実習であり、急性期看護との比較から理解を深めることができたと考える。

B病院においては、外国の方を受け持つ機会を得た学生もいた。[外国人コミュニケーション]において、「外国の方に合わせたコミュニケーションの工夫が必要」という、外

国人褥婦と信頼関係を築く関わり方について学んでいた。学生は、1年次、基礎教育科目の英語表現Ⅰ（2単位）、英語表現Ⅱ（1単位）を必修科目として履修している。実習では、英語、ポルトガル語、タガログ語を用いた自己紹介からバイタルサインズ測定の説明と実施、測定結果の説明までのコミュニケーションが求められている。

表1の実習目標3については、ほぼ全ての学生が褥婦を受けもてたことから、多くの学生が学んでいたと考えられる。

4. 新生児期の看護に関する学び

新生児の看護は、ほぼ全ての学生が経験できる。新生児のバイタルサイン測定はほぼ全員が実施している。カテゴリの中で最も多かった【新生児の観察】において、「新生児のアセスメントは、生後日数に応じた状態か判断することが必要」という、観察の重要性を学んでいた。また、施設により沐浴、ドライテクニックの違いはあるものの【沐浴のケア】において、「新生児を安心させるために一つ一つの動作を丁寧に行い安全に沐浴すること」、「湯の温度確認は、湯温計と上腕の内側で適温か確認することが重要」という、安全に実施するためには、適切な技術の必要性を実感できている。

表1の実習目標4については、ほぼ全ての学生が新生児を受けもてたことから、多くの学生が学んでいたと考えられる。

VIII. 母性看護学実習における

産科医療施設実習の学びに対する課題

今後の課題として、全ての学生が妊婦と関わる体験ができるよう、産科医療施設以外の、学内実習、産婦人科外来実習、保健センターの臨地実習、マタニティ育児用品調査の

実習からの学びの状況を把握し妊婦との関わりを体験できる実習方法を検討する必要があると考える。

また、分娩期の学びを深めるために、学内実習の中で分娩期の看護を体験できない部分は、DVD等の視聴やシミュレーション教材などを用いた学内実習で補う必要があると考える。

褥婦の産褥経過の理解をさらに深められるように教員は、学生が、退行性変化や進行性変化の観察を経験できるように、実習施設の指導者と連携を取り経験できるように調整することが必要である。

授乳見学や子宮復古の状態を触診する機会が制限されることが多い男子学生においては、受け持ち褥婦の選定や受け持ち後の良好な関係性が築けるように教員は、助言等の配慮をする必要がある。

さらに、学生が外国の妊産婦と円滑に会話ができるために、外国の方への援助に関する教材等の事前準備が必要である。

IX. 結論

A大学の母性看護学実習の1週間の産科医療施設実習に焦点を合わせ、どのような学びをしているかについて、内容分析手法を用いた質的に研究を行った。

妊娠期の看護に関する学びは、3カテゴリ、【母親学級】、【妊婦の観察】、【ケアの配慮】と3サブカテゴリが抽出された。

分娩期の看護に関する学びは、2カテゴリ、【産婦のケア】、【産婦のニーズ】と4サブカテゴリが抽出された。

産褥期の看護に関する学びは、9カテゴリ、【褥婦の精神的ケア】、【保健指導・ケア】、【褥婦の身体的ケア】、【授乳・愛着形成】、【帝

王切開の看護】、【疲労軽減への看護】、【外国人コミュニケーション】、【褥婦のケア】、【母乳・愛着形成】と21サブカテゴリが抽出された。

新生児期の看護に関する学びは、5カテゴリ、【新生児の観察】、【沐浴のケア】、【保温】、【新生児のバイタルサイン測定時の学び】、【哺乳に関すること】と10サブカテゴリが抽出された。

その他の学びは、5カテゴリ、【母性看護の意義】、【看護者の関わり】、【チーム医療】、【その他】、【看護過程・アセスメント】と10サブカテゴリが抽出された。

本研究は、学生の実習終了後の最終レポート、「母性看護学実習を通して学んだこと」の「産科医療施設実習」の学びを分析したものであるが、すべての学びを反映している訳ではない。また、単年度のデータを分析した結果に留まり、2週間の産科医療施設実習との比較した分析でないため、十分な分析に至っていない。学生により、実習日数に違いのあったことは、学生が体験できる内容に差が生じた可能性もある。本研究の限界は、今後も実習の中で随時、学生の学びを確認していきたい。

X. 謝辞

本研究の趣旨にご賛同いただきご協力していただいたA大学看護学部の学生の皆様に深く感謝いたします。

【文献】

ベネッセ教育総合研究所（2019-5-13）. 第1回妊娠出産子育て基本調査（横断研究）報告書 [2006],
<https://bbrd.benesse.jp/jisedai/research/>

[detail.php?id=3319](https://www.ajha.or.jp/topics/admininfo/detail.php?id=3319)

二川香里・松井弘美・長谷川ともみ（2015）. 男子学生の視座から捉えた母性看護学実習における学習過程. 母性衛生, 55(4), 659-667.

門貴代美（2020）. 保健センター実習を取り入れた母性看護学実習における学生の学び. 静岡県母性衛生学会誌, 9(1), 7-13.
梶原恭子, 富安俊子, 井出信（2005）. 母性看護外来実習における看護学生の学びの検討. 母性衛生, 46(2), 249-256.

北林ちなみ・中山美香（2011）. 母性看護学実習における学びの評価とそれに関連する因子. 飯田女子短期大学紀要, 28, 59-70.
瀬瀬なつ子・服部律子（2015）. 助産師による妊娠期からの育児支援. 岐阜県立看護大学, 15(1), 29-41.

厚生労働省医政局看護課（2019-4-23）. 母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について,

<http://www.ajha.or.jp/topics/admininfo/>
厚生労働省政策統括官付参事官付人口動態・保健社会統計室（2020-10-27）. 令和元年（2019）人口動態統計の年間推計,)
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai19/index.html>

文部科学省（2020-9-20）. 平成30年度一般社団法人 日本看護系大学協議会定時総会「看護系大学の現状と課題」平成30年6月18日（月）.

<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2018/06/monbukagakusyou20180618.pdf>

中田久恵・大槻優子（2014）. 母性看護学実習における学生の技術経験状況調査. 医療保険額研究, 5, 129-139.

志賀 友美 (2018). 周産期メンタルヘルスにおける現状と課題. 東海産科婦人科学会雑誌, 55, 1-8.

中京学院大学看護学部 (2019). 2019年度看護学実習要項. 母性看護学実習, 1, 中京学院大学看護学部, 岐阜.